

比較史 研究의 經驗이 극히 不足하기 때문에 國際的 協力研究・共同研究의 増大가 크게 要請된다고 생각합니다. 이상 簡單하나마 제 코멘트를 마치도록 하겠습니다. 感謝합니다.

笠原芳光

笠原：笠原芳光と申します。京都精華大学に長年勤めて定年退職いたしました。専攻は宗教思想史です。何故私がここに呼ばれたかという、金先生のお話にあったかと思うんですけども、「『日本的キリスト教』批判」という論文を30年ほど前、同志社大学人文科学研究所の『キリスト教社会問題研究』22号に書いたんですが、それを読まれて、自分の話と関連があるので、出て来いと言われたように思います。それでまず、日本的キリスト教とは何かということですが、「日本の伝統的な精神、思想、宗教とキリスト教との接触をはかる思想の総称である」という風に思います。広義のものと、狭義のものがありまして、日本ということを目覚めたキリスト教ということ、内村鑑三、或いは矢内原忠雄が言っております。「外国の仲人を経ずして、直に神より受けた基督教」という言葉を内村鑑三は大正9年に言っています。「日本的基督教」という題の文章です。或いは、「西洋の宣教師から支配、干渉を受けないで、自由、独立に伝道し、研究するキリスト教」という意味のことを矢内原忠雄は昭和9年に「基督教的日本」という文章で語っています。これらは広い意味の日本的キリスト教です。狭い意味の日本的キリスト教、これが問題なんです、それは、日本の伝統的な思想とキリスト教との接合、或いは混淆をはかる、そういうキリスト教の考え方です。この代表的な人物が、海老名弾正であります。この人は、例えば、神道、儒教、仏教、耶蘇教（キリスト教）の神は、異名同体であると、名前は異なっているけれども一つなんだということ、既に明治30年に「日本宗教の趨勢」において語っております。また、その弟子である渡瀬常吉という人は、天御中主（アメノミナカヌシ）という神道の神、これは最高神的な存在なんです。そ

れから高皇産霊（タカミムスビ）、神皇産霊（カンミムスビ）という所謂産霊神というのがあります。それと天照大神（アマテラスオオカミ）、この三つを三位一体というキリスト教の教義にあてはめて、昭和9年に『日本神学の提唱』で言っている。これは狭い意味の日本的キリスト教の思想です。このような狭義の日本的キリスト教が侵略戦争のイデオロギーの一つになったということは、言えるでしょう。ですからその点では、特に狭い意味の日本的キリスト教というのは、今日においても批判されるべきものであると思うんです。しかし日本のキリスト教と申しますけれども、それならですね、はたして何々のキリスト教でないキリスト教があるかということです。例えば、韓国のキリスト教にも韓国的キリスト教というものがあると思います。ところでルドルフ・ブルトマンという聖書学者が、戦後1949年に、『原始キリスト教』という本を著しまして、これは翻訳もあるんですが、その中に、キリスト教はユダヤ教とギリシア思想とオリエントの密儀宗教、それらの混淆現象であるということを言っております。それから考えますと、キリスト教の教義ですね、贖罪と復活という、イエスが十字架にかかって死んだことが罪の贖いであるとか、イエスは死後、復活したという教義、いずれも神話ですけれども、或いは終末思想とか、或いは選民思想とか、或いはイエスはキリストであって、神であると同時に人間であるという神人両性の思想、或いは三位一体というような教義ですね。或いは、例えば洗礼とか聖餐とかいう儀礼、および、例えばカトリック教会のように教皇というものを頂点に立てたヒエラルキーという制度や組織、こういうものにはすべて、キリスト教以外の諸宗教の、或いは諸文化の思想が多く混入していると思います。それがキリスト教なのです。19世紀のフレーザーの『金枝篇』を読みますと、キリスト教の今申し上げたようなことは多く、ギリシアやローマやオリエントなどの思想にあったと言っています。その意味で、純粋なキリスト教というのは一体あるのかという問題です。キリスト教は権威主義の宗教だと思うんです。特にですね、パウロという人物はイエスに会ったことのない、イエスの死後に弟子になったのですけ

れども、このパウロが、おもにキリスト教を作ったといってもよい。イエスが作ったのではありません。イエスは権力否定の思想者でありましたが、パウロは「ローマ人への手紙」の13章で「人はすべて上に立つ権威に従うべし」と言っています。神によって立てられた権威、当時のローマ皇帝を始めとする権威に従うべきだということを述べている。こういうキリスト教の思想が当初からあるわけです。そのようにしてキリスト教というのは紀元1世紀にイスラエルに発生したのですけれども、その後、パウロなどの伝道によりましてローマに伝わり、ローマも遂にキリスト教を公認せざるを得なくなった。さらにヨーロッパにわたり、そしてその土地の宗教を征服し、或いはそれと混淆した。最近ヨーロッパでは、キリスト教以前のケルト文化やゲルマン文化、あるいはドルイド教という森の宗教などの研究が非常に進んでいますが、そういうものを滅ぼして、或いはそれと混淆して、キリスト教はヨーロッパに広がった。これがヨーロッパ的キリスト教です。それはフランス的キリスト教、ドイツ的キリスト教等になっている。さらにアメリカにわたり、アジア、アフリカにわたって、各地でそういう何々のキリスト教というものになっている。こういうキリスト教というのは一体何であるか。それは日本だけじゃないんです、侵略戦争を行った国家はキリスト教の歴史を通じて非常に多いんです。イギリスも、フランスも、或いは南米においても、侵略戦争がキリスト教のイデオロギーによって行われた、こういう問題です。こういう根本的なことから考えないといけないと思います。最後に言いたいのは、イエスという人はキリスト教の創始者ではないんです。キリスト教の開祖とされているけれども違うんです。イエスは自らを救主、すなわち宗教的権力者を意味するキリストとは言わなかった、思わなかった。またイエスは洗礼を受けたけれど人には洗礼をさずけなかったというのが最新の聖書学の研究成果です。ですから、イエスは権力否定の自由な、そのような精神で人々を救った根源的な宗教性の人物です。キリスト教を根本的に改革するためには、そのイエスに帰るべきです。パウロや原始教団に帰っては駄目だと私は思います。その意味で、日

本的キリスト教も何々のキリスト教もイエスに帰ることによって、はじめて新しくなる。イエスの思想はいわゆる宗教ではないんです。イエスは宗教性であって、制度、教義、儀礼というものを全く必要としない、そういう新しい人間でありました。

南 富鎮

南：筑波大学の南富鎮です。この三日間の発表を聞いて感じたのは、多くの発表が、ほとんどの発表がそうだったと思うんですが、韓国の近代、あるいは近代文化、近代文学という用語を自明のものとして語っていることです。植民地の近代化論もそうですが、すでに近代という枠組みで植民地期を語っている印象でした。果たしてそうなのか。近代という形で、そのような実態があったのか、自分なりにいろいろ考えてみました。現在、モダニズム、ポストモダニズム、コロニアリズム、ポストコロニアリズムなどと、いろいろ言われているのですが、もしも、近代というものが存在しないということになるとそれに対してのポストという概念もなくなってしまう。ひょっとしたらポストモダニズム、ポストコロニアリズムという概念によって近代の存在が追認されているところもあるのではないかと。たとえば、韓国近代文学というのは、私が大学に通っていた時期にはこういう言葉を使わなかったのです。中国は現在も近代文学という言葉を設定していないようですが、それは何故なのか。近代という言葉に帝国主義の臭いが強烈に入っているからなのではないか、私は自分なりにそう考えております。

一方で、韓国近代文学は、日本近代文学の方法論を盛んに取り入れている。たとえば、肉筆原稿や書簡の重視、学会、個人学会、あるいは全集の作り方などは、日本近代文学を意識しながら作りあげられたものと、私は思います。韓国近代文学は日本近代文学に対抗する形で、あるいは日本近代文学に照射されることによって出来上がったものであって、それ自体として本当に存在しているのか疑問なわけです。日